『蜘蛛の糸』の材源をめぐって

生　野　金　三

Ⅰ　はじめに

童話『蜘蛛の糸』は，大正７年鈴木三重吉の主宰する児童雑志『赤い鳥』の創刊号に掲載された。創刊号に掲載されるほどであるから，この作品に対する評価はかなり高かったと思える。当時『赤い鳥』の編集助手をしていた小島政二郎は，三重吉が『蜘蛛の糸』の原稿を手にした時の状況を,「相好を崩して喜び『旨いねえ,水際立ってゐやがらあ。』と感嘆した。」[1]とし,更に「まるで外の奴等とはモノがちがふ。『赤い鳥』はじまって以来，こんな傑作を書いたやつは一人もいやしない。」[2]としている。当時の児童雄誌を批判し，その芸術性の皆無を嘆いていた三重吉であったが故に，月刊雑誌『赤い鳥』の主旨（芸術として真価のある純麗な童話を創作する。）[3]に見合った『蜘蛛の糸』を得たことは大変な喜びようであったのだろう。『蜘蛛の糸』は，その後国語読本に収録されたり，更には中学校の読本に転載されたりして好評を博した。このように『蜘蛛の糸』に対する肯定的な評価は三重吉によって代表されるが，逆に否定する評価もないわけではない。それは正宗白鳥によって代表される。正宗は,「極り切った秩序ある世界をやすやすと受け入れて，そこに何等の懐疑の苦も感じていない。」[4]とし，「私はこの頃『ガリバア旅行記』を読み直したが，ここに描かれた童話の世界を見詰めてゐると，寒風に肌の擘かれる思ひがされる。それに比べると,『蜘蛛の糸』などの童話の世界は，ストーブで温められた温室的書斎での仮寝の夢に過ぎないように思われる。」[5]としている。この評言は,年少者のための童話という視点から考えると必ずしも当を得えているとは言い難いが，正宗が批判した背景には,「芥川に対しては，世界の文壇の常套的芸術以上のものを期待してゐたため,」[6]と言及していることからも認められるように『蜘蛛の糸』の出来栄えに対してかなり不満を感じていたためである。

このように『蜘蛛の糸』に対する毀誉さまざまの評価は，作品の世界の読み取りの違いに起因していることは言うまでもない。

本論では,『蜘蛛の糸』の材源について触れ，それと『蜘蛛の糸』との対比を以下に試みる。材源を探ることによって,『蜘蛛の糸』の解釈のあり様に一石を投じると考える。

Ⅱ『蜘蛛の糸』の材源

『蜘蛛の糸』に対して,楠山正雄は「この童話にも，どこか西洋人の作者の書いた東洋の物語といった感じがする。」[7]と評している。楠山の鋭い洞察に示される如く，この作品は芥川龍之介の創作的再話と考えられている。その材源については，ドフストエスキー『カラーマゾフの兄弟』の中の「一本の葱」[8]説，あるいはトルストイ『カルマ』の翻訳『因果の小車』の中の「蜘蛛の

糸」[9] 説等がある。芥川はいずれも読んでいたのではないかと考えられる。それは，前者においては，書簡に「やっとカラーマゾフが完りに近づいた小説ものあの位長いとげんなりする。が随分感心した。」[10]（大正6年7月26日付）「ボクは悪霊もよんでいるがカラーマゾフ程ではないがすゐぶん感心させられる。」[11]（大正6年10月30日付）と触れていることから明らかである。一方，後者においては，『カルマ』の原文が掲載されているアメリカの雑誌「オープン・コート」（ドイツ生まれの哲学者ポール・ケーラスが編集発行人）を手にしたトルストイが1894年にロシア語に翻訳して以来，鈴木大拙によって日本語に翻訳されるまでの5年間の経緯をたどれば芥川が『因果の小車』を読んでいたことが明らかである。1994年といえばトルストイは教訓的傾向の強い作品を書くようになっていた期である。したがって，エゴイズムという人生の宿命的問題を掘り下げる意図の下に『カルマ』の翻訳を手懸けたと考えられる。『カルマ』は発表後ヨーロッパ諸国に紹介されるが，その後，オープンコート社では1895年に『カルマ』を日本でも出版している。日本版『カルマ』の初期は挿絵入りの英文の典籍であったが，翌年再版され，更に1898年には，鈴木によって『因果の小車』といった題名で出版されている。鈴木は，アメリカにおいてオープンコート社の東洋部門を担当したこともあって，『カルマ』の翻訳を行ったのである。

以上のことを念頭に置く時，芥川が「一本の葱」や「蜘蛛の糸」の物語を知っていたことは疑う余地のないことである。

ところで，芥川の『蜘蛛の糸』の材源であるが，従来『カラーマゾフの兄弟』の中の「一本の葱」であるとされていた。しかし，今日においては『因果の小車』の中の「蜘蛛の糸」と見られている。前掲のことを踏まえる時，「一本の葱」だけをその材源と断定するわけにはいかないように思う。「一本の葱」と芥川の『蜘蛛の糸』との話を対比すると，テーマ（どんな悪人でも慈悲の心があってそれが救いへの契機となっており，しかし，自分だけよければよいといったエゴが自分を破滅に導くものである。）の共通性，あるいはお婆さんと犍陀多，神様と御釈迦様，火の湖と地獄の血の池，乞食女と蜘蛛，一本の葱と蜘蛛の糸と見事に対照していること等から「一本の葱」を材源としたことも頷けるように思う。しかし，鈴木訳の『因果の小車』と芥川の『蜘蛛の糸』とを対比する時，芥川が材源として利用したものは，鈴木訳の『因果の小車』に帰結するように思う。

以下，両者を対比するが，その前に鈴木訳の『因果の小車』の中の「蜘蛛の糸」の部分とトルストイの『カルマ』の中の「蜘蛛の糸」（中村白葉訳）と対比する。

両者の最も大きな異同は以下に示す叙述である。『カルマ』の，

「伝陀は，地獄で苦しんでいる悪魔の嘆願を耳にすると，彼のところへくもの網にのせておつかわしになりました。そのくもは申しました。――『わたしの綱におつかまりなさい。そしてそれを伝わって地獄からぬけだしなさい』くもの姿が見えなくなると，カンダータは蛛綱につかまり，」[12]

の部分が，『因果の小車』では，

「かくて仏は地獄の中に悩める犍陀多の熱望を聞き給ひ宣ふやう。『犍陀多よ，汝は嘗て仁愛の行

をなしたることなきか，之れあらば今また汝に酬い来たり汝をして再び起たしむるに至らむ。されど罪業の応報によりて厳しく苦しめられ，これによりて始めて一切の我執を脱し貪瞋痴の三毒を洗ふにあらざれば，永劫解脱の期あるべからず。』

犍陀多は黙然たりき，彼は残酷なる人なりしが故に，生来嘗て一小善事をも為さずと思惟したればなり。されど如来は知り給はざる所なし。この大賊の一生の行為を見給ふに，彼嘗て森の中を行けるとき，地上に一つの蜘蛛の蠢々たるを見たりしも，彼は『小虫何の害をもなさず之を踏み殺すも無残なり」と思惟したることありき。

仏は犍陀多の苦悩を見て慈悲の心に動かされ給ひ — 縷の蜘蛛の糸を垂れ蜘蛛をして云はしめ給ふやう,『この糸を便りて昇り来れ』と。蜘蛛去れるとき犍陀多は力を尽して糸に縋り上りたるに,」[13]

となっている。両者を対比する時，後者においては，犍陀多が嘗て森の中で一匹の蜘蛛を助けてやったといった話が挿入されている。これは，トルストイの『カルマ』の意図（生命はただ個人の否定の中にだけある。すなわち，生命を捨てるものが生命をうるのであるということ，人々の幸福はただ彼らの神との結合にあり，神を通しての相互の結合であること,)[14]と「他人に助けを与えるものは，おのれに善を為すものである。」[15] といった護符とから鈴木が新たに着想して加筆したものであると考えられる。『因果の小車』では，地獄で苦悩している犍陀多の救いへの熱望に対して，先ず，仏は犍陀多に対してかつて仁愛の行をなしたか否かを問い，そして，一小善を為したことが分かると，その報いとして一縷の蜘蛛の糸を垂らすといった慈悲の心に致っている。ここには，両者のコミュニケートの様相をみることができる。芥川の『蜘蛛の糸』と両者とを対比する時，鈴木訳の『因果の小車』と類似していることが一見して分かる。それは，共に蜘蛛を助けてやったことが救いへの契機として叙述されていることと，主人公「犍陀多」の表記が漢字で両者同じであることとからである。

以上のことは，芥川が材源として利用したものは，鈴木訳の『因果の小車』であることを立証するに足るものである。

Ⅲ『蜘蛛の糸』とその材源との対比

芥川の『蜘蛛の糸』が鈴木訳の『因果の小車』を材源として利用したものであることを念頭に置く時，芥川がどのような内容を容れ，どのような内容を捨象して創作したのかといったことが問題となる。このことは，芥川の創作的才能と関わると同時に,『蜘蛛の糸』の主題をどう読み取るかといったこととも関わりをもつものである。

芥川が独特な才能によって『蜘蛛の糸』を創作したことは誰しも認めるが，では一体どういった意図の下に創作したのか，以下に考えてみる。

『蜘蛛の糸』の作品の世界は,叙述全体を通して捉えることが前提であることは言うに及ばないが，今日作品の主題について，勧善懲悪や悪因悪報，御釈迦様の慈悲心，犍陀多の行為の中に，生に執着する人間のエゴ等とさまざまの捉え方があることを考える時，芥川が材源とした『因果

の小車』の背景を知悉することは,『蜘蛛の糸』の解釈に一石を投じてくれるものと考える。

以下，鈴木訳の『因果の小車』(「蜘蛛の糸」の部分。以下，同じ。) と芥川の『蜘蛛の糸』とを対比してみる。芥川は,『因果の小車』を見事に換骨奪胎しているが，両者の決定的な違いは，芥川が『因果の小車』における抽象的な教訓的要素を払拭しているところにある。その部分は，

「唯是信心の一念織きこと蜘蛛の糸の如くなれども，無辺の衆生は悉く之に牽れてこそは解脱の道に到るなれ。其衆生の数多けれだ多きほど尚正道に帰すること一層容易になるわけなり。されど一たび我執の念に惹れて,『是は吾がものなり，正道の福徳をして唯われのみの所有ならしめよ。』と思ふことあらんには,「一縷の糸はたちまちに断滅して汝は旧の我執の窟宅に陥らん。そは我執の念は亡びにして真理は生命なればなり。そも何をか称て地獄といふ。地獄とは我執の一名にして，涅槃は正道の生涯には外ならず」[15]

といった叙述である。この叙述は，糸が切れて犍陀多が奈落の底へ落ちた際，仏陀が犍陀多について，

「我執の妄念は尚犍陀多の胸中に蟠まり居たりしなり。彼は上の方に登りて正道の本地に到らんとする決定信心の一念に如何なる不可思議の力あるかを解せざりしなり。」[17]

と述べた後に続いている。犍陀多の言動の結果を基に，それについて説いているのは，いかにも教訓的である。

結の部分において，蜘蛛の糸が奇跡的な力をもっていたという教訓的要素をもって締め括っているのは，それ以前にこれと関わりをもつ内容が提示されていることを暗示している。その内容は以下に示す通りである。この部分も芥川がとっ払っていることは，容易に推測できる。

犍陀多が仏陀に向かって絶叫して，

「大慈大悲の御仏よ願わくは憐をたれさせ給へ。わが苦悩は大なり，われ誠に罪を犯したけれども正路を踏まんとの心なきにあらず。されど如何にせん遂に苦界を出づる能はず。世尊願はくは吾を憐み救ひ給へ」[18]

と救いを求めたため，仏陀は犍陀多に対して，

「而して善行は之に反して生に赴くの道なり。われらの一言一行も必ず其終りあれども，善行の進歩には極あることなし。一不善と雖も其裡には新しき善の種子があるが故に，生々として長じて已まず。」[19]

と救われる可能性を提示している。その後，犍陀多に対してかつて仁愛の行いをなしたか否かを問い，仁愛の行いがあれば報いることができるとしているが，罪業の応報によって厳しく苦しめられて，一切の我執を脱することであるとしている。これに続く叙述は，芥川の『蜘蛛の糸』と大体同じである。

上述したように仏陀は奈落にいる犍陀多の嘆願を受け止め，そして，それに対して救われるべき条件を提示している。こうした仏陀の犍陀多への対処の仕方は，救済を暗示しているようにも思われる。また，そこには両者のコミュニケートの様相も垣間見ることができる。犍陀多はこうしたことも捉えることなく，結局我執の念を脱しきれず奈落の底へ落ちていったのである。犍陀

多に対して救われる条件を提示したにも拘らず，それが全うできなかったが故に教訓的要素をもって結を締め括ったのであろう。このことは，善因や悪果の原因はその人自身の行為の中に存在するといった仏教思想を念頭に置く時，当然のことであると考えられる。

ところで，芥川が上述したような教訓的要素を払拭したのはどのような意味があるのだろうか。芥川が，蜘蛛の糸は何百万人人をも支え得るものだという奇跡的な前提をとっ払ってしまったのは，作品の宗教的意味をうすめるとともに，文学的リアリティーを増したものとも考えられている。芥川は，教訓的要素を払拭し，しかも犍陀多を完全に突き放すことによって，人間の内面に潜む本来の醜さを，人間が生きていくためには人間として必要であると思われるエゴイズムの問題を提示し，それを読者に考えさせたかったのかもしれない。

『因果の小車』における結論を故意に切り捨て，読書にエゴイズムの問題を提示し，読者自身に解答を求めることによって，年少者だけでなく年長者までも魅了するに至ったのだろう。もし，『因果の小車』の教訓をそのまま借用したとすれば，安易な仏教説話に終わったにちがいない。ここには，芥川の創作的才能を認めないわけにはいかない。

こうした創作的才能は随所に見られるが，特に犍陀多を冷たく突き放している場面，あるいは作品の構成上においてそれは顕著である。前者は，ある意味においては人間の暗い宿命に対する批判を示すことから童話として適わないといった気もするが，しかし，芥川はこうしたことに対して抱負をもっていたと考えられる。それは，書簡に「御伽噺は甚いゝ加減なもので恐縮し切ってゐます長い方が短いのより余程わけない『蜘蛛の糸』の方がもっと苦しみました。」[20]（大正７年10月14日付）としていることが，それを裏付けるものであると考える。芥川が，この童話に対して，努力を傾注してきたことが明らかである。芥川は「御釈迦様の御目から見ると，浅ましく思召されたのでございましょう。」[21]と犍陀多を突き放しているが，「御釈迦様の御目からみると」という但し書き風の一句に重要な意味を内包させている。すなわち，芥川の目からみると御釈迦様の目とは異なった価値意識が存在しているということである。一方，後者は，建築の均整美をおもわせるような美しさがある。すなわち，極楽（第１章）と地獄（第２章）と極楽（第３章）といった構成からも分かるように，第１章と第３章は首尾照応し，それは額縁的構成になっている。極楽と地獄との間をわずかの間であるが，細い銀色の蜘蛛の糸でつながれた両者の世界は，見方によっては，天上と地下，明に対する暗，暖に対する寒，静に対する動といったような対立する概念として捉えることも可能である。

原話においては，仏陀と犍陀多との対話の様相が認められるが，芥川の『蜘蛛の糸』においては，それは認められない。一見すると犍陀多と蜘蛛の糸との因果関係はなく，しかも蜘蛛の糸は謎解きのような感じがする。しかし，作品の背景を知悉する時，決してそうではない。

『蜘蛛の糸』の，

「もし万一途中で断れたと致しましたら，折角ここまでのぼってきたこの肝腎な自分までも，元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。……今の中にどうにかしなければ」[22]

といった叙述，

「こら，罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。」[23]

といった叙述，更には，

「自分ばかり地獄からぬけだそうとする，犍陀多の無慈悲な心が,そうしてその心相当な罰をうけて，」[24]

といった批判は，犍陀多が我執の妄念によって応報をうけ,「一縷の糸は忽ち断滅し」[25]とある原作の根本理念を忠実に伝えたものと考えることができる。

以上，鈴木訳の『因果の小車』と芥川の『蜘蛛の糸』との根本的な相違を述べたが，ここで具体的な描写について対比し，芥川の叙述の特徴を探ることにする。

以下には，作品のクライマックスの一要所を抜き出して対比する。

『因果の小車』の，

「『去れ去れ此糸はわがものなり』と覚えず絶叫したりしかば，糸は立刻に断絶して其身はまた旧の奈落の底で落ちたりける。」[25]

とある部分を，芥川は，

「そこで犍陀多は大きな声を出して，『こら，罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて，のぼって来た。下りろ。下りろ。』と喚きました。

その途端でございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が，急に犍陀多のぶら下っている所から。ぷつりと音を立てて断れました。ですから犍陀多もたまりません。あったと云う間もなく風を切って，独楽のようにくるくるまわりながら，見る見る中に暗の底へ，まっさかさまに落ちてしまいました。」[27]

と作り替えている。両者を対比すれば，一見して分かるように，芥川は原作の簡潔な叙述に説明を加えると同時に，視覚的な要素を加えることによって情景を豊かに描写している。

以上,『蜘蛛の糸』とその材源と考えられる鈴木訳の『因果の小車』とを対比してきた。上述したことから，芥川の『蜘蛛の糸』は原作の根本思想を踏襲したことが明らかである。このように考える時，勧善懲悪や悪因悪報，あるいは御釈迦様の慈悲といった主題の捉え方は検討の余地があるように思う。主題については，吉田精一に代表されるような，人間の内に潜む本来の醜さ，どうにもならぬエゴイズムの問題を提示しているといった解釈が妥当のように思う。

Ⅳ　おわりに

芥川の『蜘蛛の糸』の材源，あるいはそれと『蜘蛛の糸』との関わりについて述べてきた。『蜘蛛の糸』が創作的再話であるといったことを念頭に置く時，その材源を探ることは不可避の作業であるように思う。このことを踏まえて，作品の解釈あるいはエゴイズムの問題について論究していく必要があろう。

〈注〉

1）　吉田精一『近代文学注釈大系　芥川龍之介』　有精堂　P．334参照

2）　同上書　P．334参照

3）　福田清人　「赤い鳥の総論」（『解説　赤い鳥　複刻版別冊1』収録，日本近代文学館　P．3）

4）　正宗白鳥　「現代の批評」（『芥川龍之助案内』収録　P．177）

5）　同上書　P．178

6）　同上書　P．178

7）　楠山正雄　「蜘蛛の糸・りんごのお化」（『日本童話名作選集』収録　新潮社　P．228）

8）　米川正夫訳　「カラマーゾフの兄弟」（『世界文学全集第11巻』収録　河出書房　P．289）

9）　中村白葉訳　「カルマ」（『トルストイ全集9　後期作品集上』収録　河出書房　P．306～P．307）

10）　芥川龍之介　『芥川龍之介全集　第16巻』　岩波書店　P．193

11）　同上書　P．211

12）　中村白葉訳　前掲書　P．307

13）　片野達郎　「芥川龍之介『蜘蛛の糸』の出典考」（『東北大学　教養部紀要　第7号』収録　東北大教教養部　P．65～P．66）

14）　中村白葉訳　前掲書　P．306～P．307を参照

15）　同上書　P．304

16）　片野達郎　前掲書　P．66～P．67

17）　同上書　P．66

18）　同上書　P．65

19）　同上書　P．65

20）　芥川龍之介　前掲書　P．20

21）　芥川龍之介　『蜘蛛の糸・杜子春』　新潮社　P．12

22）　同上書　P．11

23）　同上書　P．11

24）　同上書　P．12

25）　片野達郎　前掲書　P．67

26）　同上書　P．16

27）　芥川龍之介　前掲書　新潮社　P．11